

「令和3年度（2021年度）卒業生アンケート」

大学教育への満足度および学修状況に関する項目の分析

筑波学院大学 IR 担当

調査の概要

筑波学院大学では、昨年度の卒業生を対象に「令和元年度卒業生アンケート」を実施している。調査項目は学生生活や経済支援に関する項目まで多岐にわたるが、本稿では卒業生の大学教育への満足度および4年間の学修状況に関する自己評価を分析し、これからの教育の改善に活用するものである。

実施時期:2022年2月24日(金)～2022年3月11日(金)(*最終日は卒業式)

調査対象:2021年度 経営情報学部卒業生

調査方法:学籍番号, 氏名を記入するアンケート方式(Web, 用紙)で実施

*) 学籍番号, 氏名は提出状況管理のためのみに使用.

調査目的(アンケート教示文より):

この調査は、本学がより良い教育の実現を目指すために行うものです。ご協力をお願いします。

該当する項目に○をつけてください。

なお、この調査は無記名で提出してください。本調査以外の目的で使用することはありません。

例年実施しております、「卒業アンケート」を Google Forms を使用して実施します。本アンケート結果は、次年度以降の改善に必要なアンケートで、卒業生の皆さまからの率直な意見を聞きたいと考えております。本アンケート未回答者は、卒業式当日に紙での回答をお願いすることになります。そのため、事前の回答いただければと思います。よろしくをお願いします。

回答者数

専攻したコース	回答者数
情報デザイン(ID)	18名
メディアデザイン(MD)	36名
グローバルコミュニケーション(GC)	24名
ビジネスマネジメント(BM)	29名
(未回答)	1名
計	106名

調査結果「大学教育への満足度」より

1. 授業全体に対する満足度

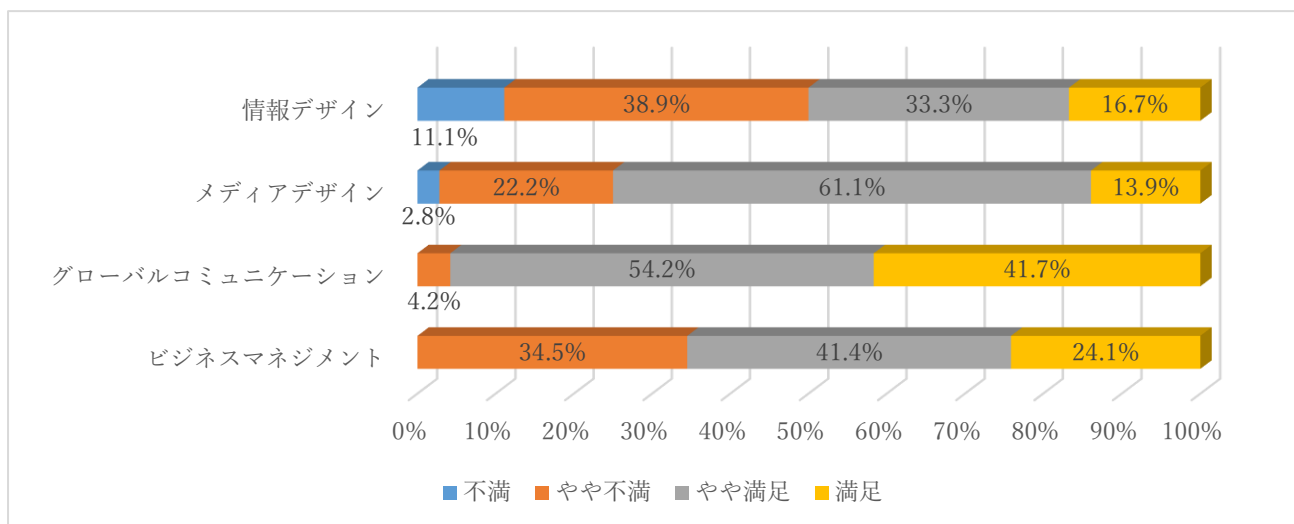


図 1. 授業全体の内容に対するコース別満足度の学生割合

「Q. 授業全体をふりえて満足でしたか。」という質問項目に対し、4段階による回答を求めた。対象者全員で見ると、授業全体の評価は肯定的である。特に MD, GC, BM は 70%以上で肯定的な評価をもらった。一方 ID については、評価が半々に分かれている。後述する「学修状況への自己評価」と比較すると、自身の「専門知識と応用力」の成長を評価する学生の割合は多いことは、結果の解釈において留意するべきであろう。

2. 講義内容に対する満足度

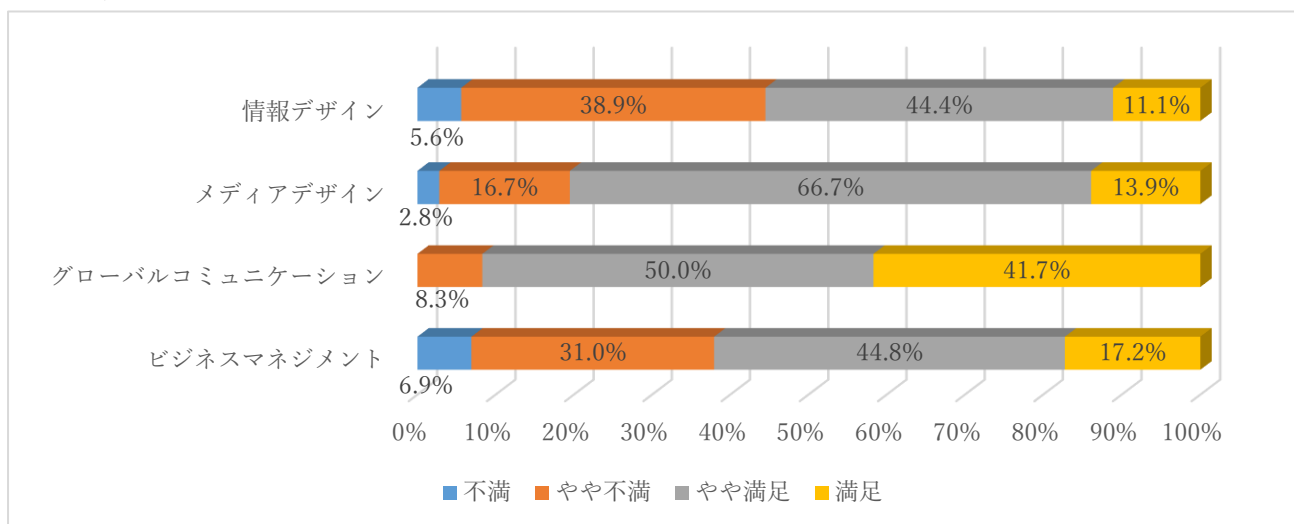


図 2. 講義内容に対するコース別満足度の学生割合

「Q. 講義内容について満足でしたか。」という質問項目に対し、4段階による回答を求めた。どのコースも概ね肯定的評価を得られている。特に GC は「満足」が 40%以上であり、「やや満足」を含めると 90%以上となった。「やや不満」、「不満」が約 40%程度となっている ID, BM については授業研究会等を通じて、講義内容の向上

を図る必要があろう。

3. 実習・演習科目の授業内容に対する満足度

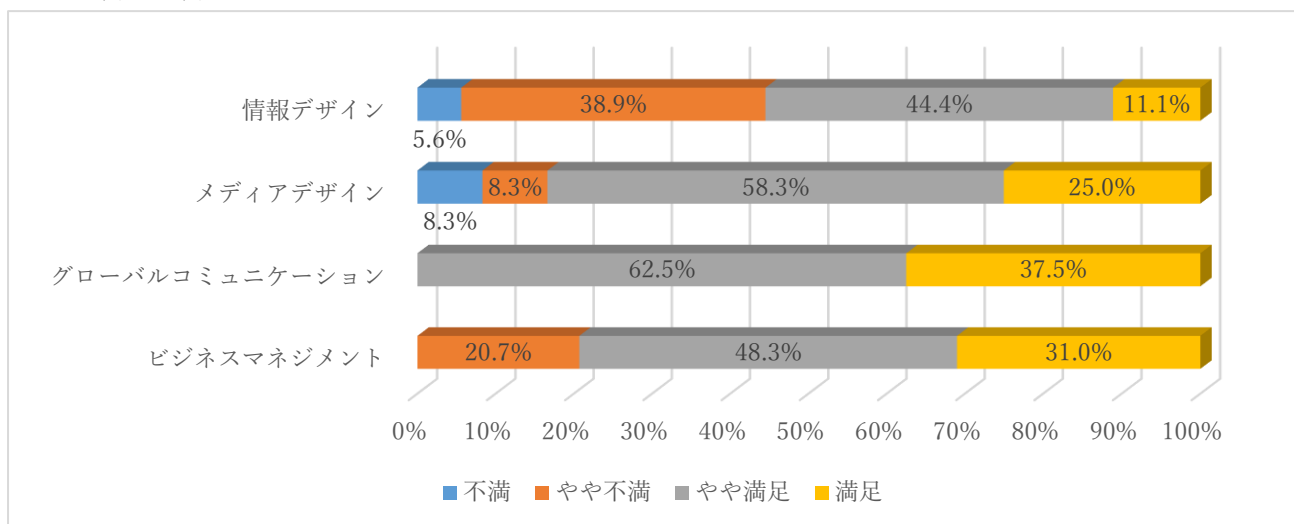


図 3. 実習・演習科目などの授業内容に対するコース別満足度の学生割合

「Q. 実習・演習科目，卒業研究などの授業内容について満足でしたか。」という質問項目に対し，4段階による回答を求めた。GC, BM は「不満」と回答する学生がいなかった。ただし，ID については「やや不満」「不満」が40%強と否定的な評価も見受けられた。演習形式の多い授業のため，学生のニーズを把握した上で翌年度以降に対処したい事項と考えられる。

4. 卒業研究に対する満足度

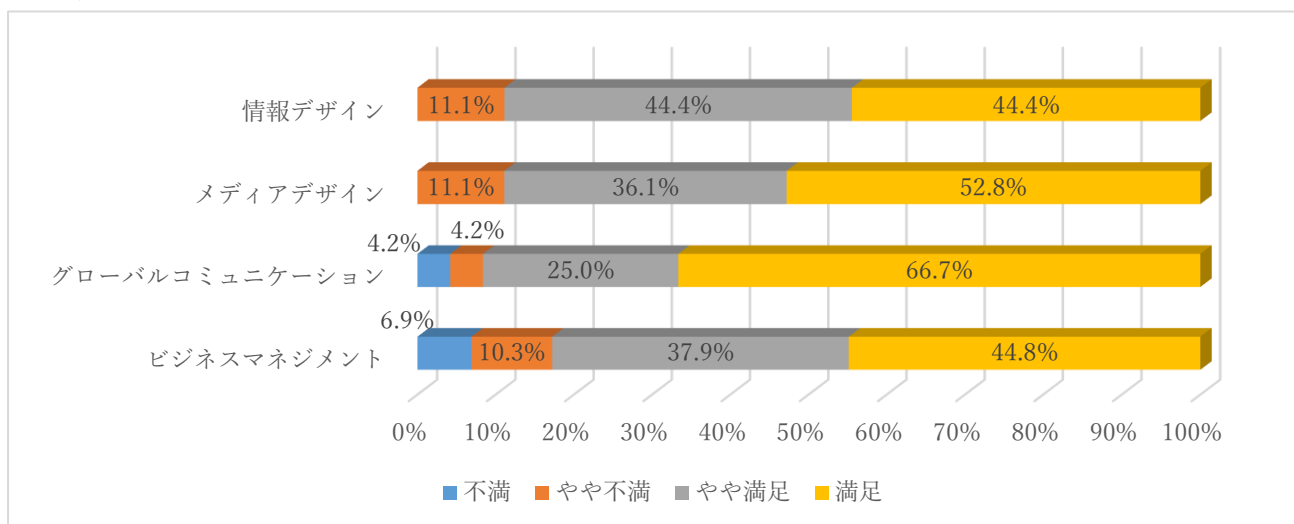


図 4. 学生生活に関するサービス全般に対するコース別満足度の学生割合

「Q. 卒業研究について満足でしたか。」という質問項目に対し，4段階による回答を求めた。すべてのコースで8割以上が「やや満足」または「満足」と回答した。卒業研究に関して独立して満足度の調査を行ったのは本年度からであったが，総じて高い満足度を得られたと考えられる。

5. 学生生活に関するサービス全般に対する満足度

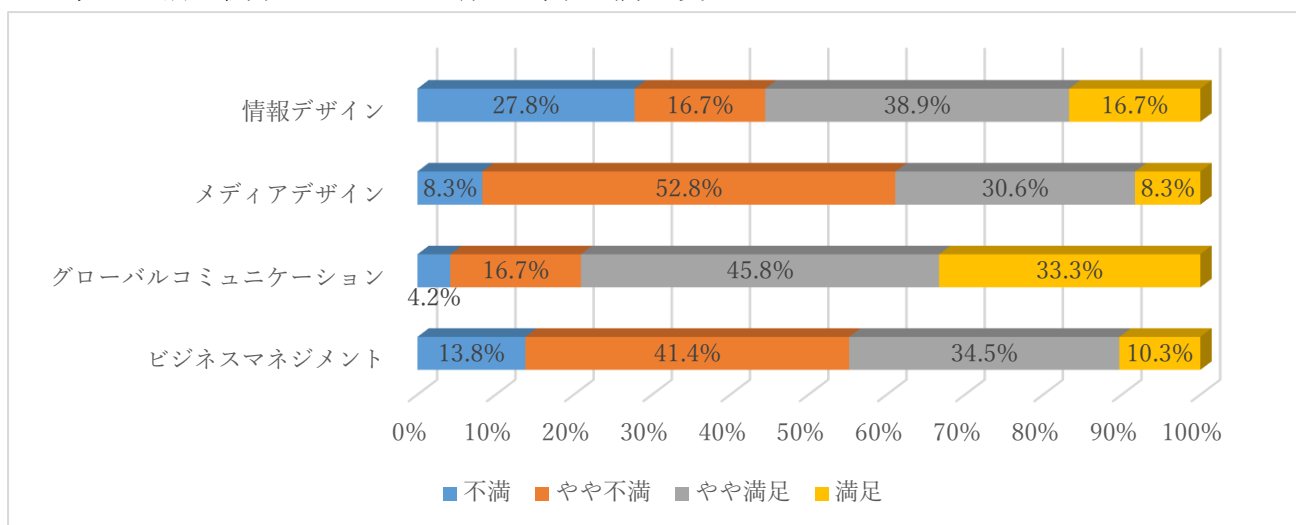


図 5. に対するコース別満足度の学生割合

「Q. 学生生活に関するサービス全般について満足でしたか。」という質問項目に対し、4段階による回答を求めた。「学生生活」全般についてのサービスになるため、コースによる回答傾向の相違についての検証はせず、卒業生全体の回答実数を確認した。「満足」「やや満足」と回答した学生数は 56 名に対し、「不満」「やや不満」と回答した学生数は 51 名であり、回答傾向が拮抗していた。

調査対象となった学年は、3年次にコロナ禍によるオンライン授業の実施や対面形式での活動の禁止、自粛がなされた学生である。学生活動の中心になれる時期に対面形式のイベント等が実施できなかったこと等による満足度の低さが示された可能性も考えられる。

6. 学習支援に関するサービスに対する満足度

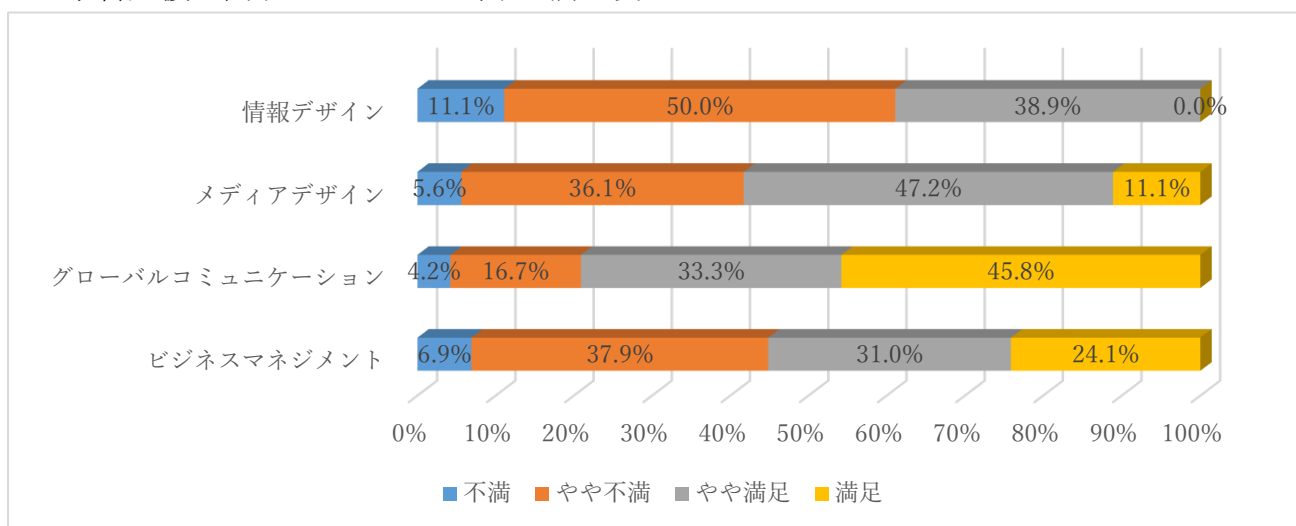


図 6. 学習支援に関するサービスに対するコース別満足度の学生割合

「Q. 学習支援に関するサービスについて満足でしたか。」という質問項目に対し、4段階による回答を求めた。2020年度のデータと比較すると、「不満」「やや不満」の割合がやや高くなる傾向が認められた。授業時間外の学

習支援については未検討な事項も多いため、各コースが対応できるサービスについて検討する必要があるかも知れない。

7. 教員および事務職員の就職支援への対応・指導に対する満足度

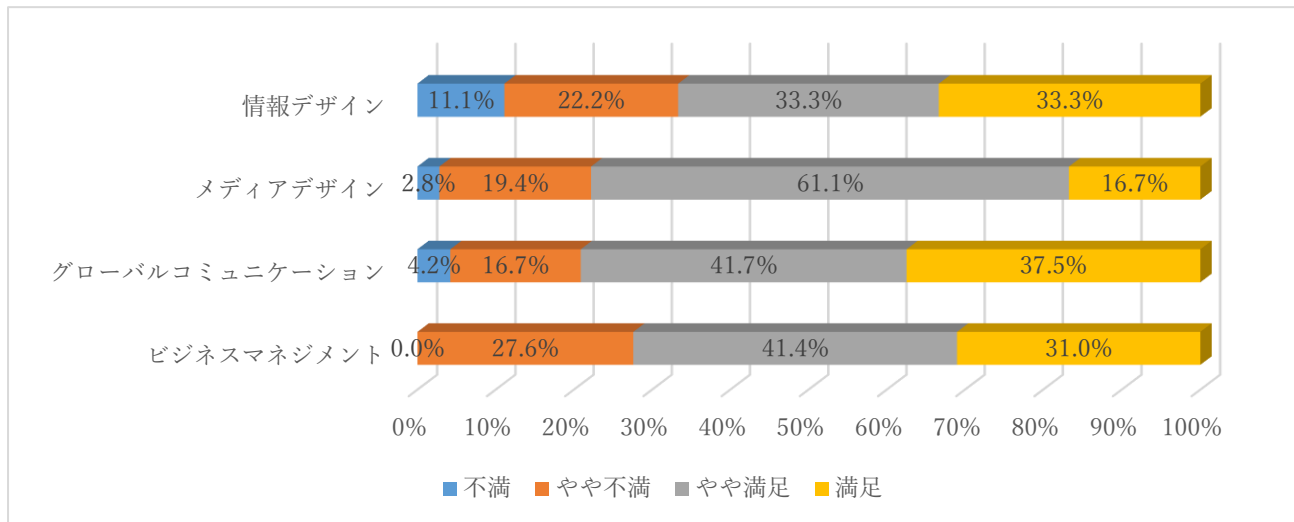


図 7. 教員および事務職員の就職支援への対応・指導に対するコース別満足度の学生割合

「Q. 教員および事務職員の就職支援への対応・指導について満足でしたか。」という質問項目に対し、4段階による回答を求めた。各コースでの回答傾向に大きな偏りはなく、「満足」「やや満足」の割合は65%～80%程度となっていた。就職支援への対応を直接質問した項目は本年度からであり、今後の回答の推移を確認した上で分析の対象としたい。

調査結果「学修状況への自己評価」より

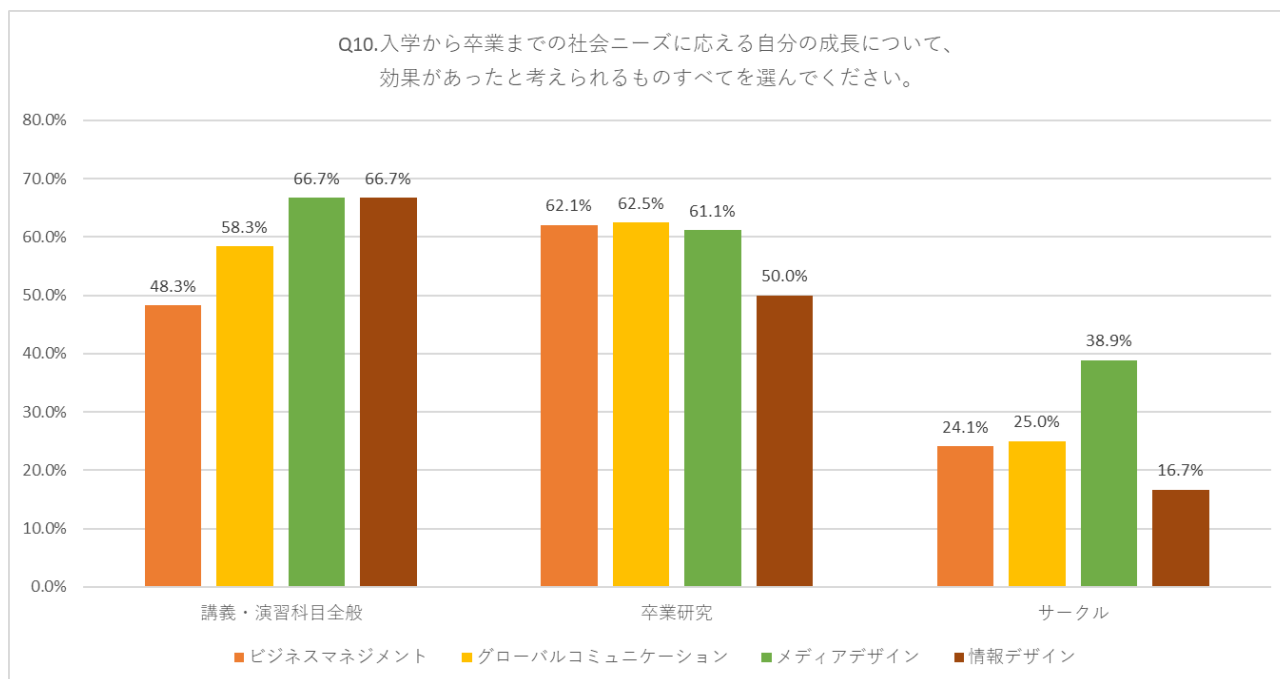


図 8. 社会ニーズに応える成長に効果のあった事項に対するコース別選択率

上図は「入学から卒業までの社会ニーズに応える自分の成長について、効果があったと考えられるものすべてを選んでください。」の質問項目に対して選択された項目の各コース内での回答の割合を示したものである。

前年度と比較すると、自分の成長に効果があった項目として「講義・演習科目全般」と回答した割合が全体的に高くなっていた(2020年度 BM コース 28%, GC コース 32%, MD コース 41%, ID コース 48%)。調査対象となった学年は、実践科目を中心とした地域連携活動の非必修化と、最終学年で新規採用の常勤教員が多数配置された学年であった。これらの変更が自己評価へ影響を与えていたかについては一考の余地がある。

「卒業研究」が自身の成長に有効であったと回答した割合は大きな傾向の変動はなかったが、BM コースを選択した割合は高くなっていた(2022年度 BM コース 56%)。当年度は BM コース所属の教員で退職、異動した教員が多く、卒業研究の対応はイレギュラーなものが多かったが、大きな影響なく指導できたことが伺える結果であった。

「サークル活動」を選択した割合はコースごとの変動はあるが、全体の割合は大きな変動はなかった。その他の回答としては「アルバイト」「就職活動」「教員とのかかわり」「友人・教員含む人間関係」「あまり実感がない」などが自由記述で認められた。“社会ニーズに応える自分の成長”と質問すると、必ずしも大学生活の中に限定せずに回答していた結果と考えられる。

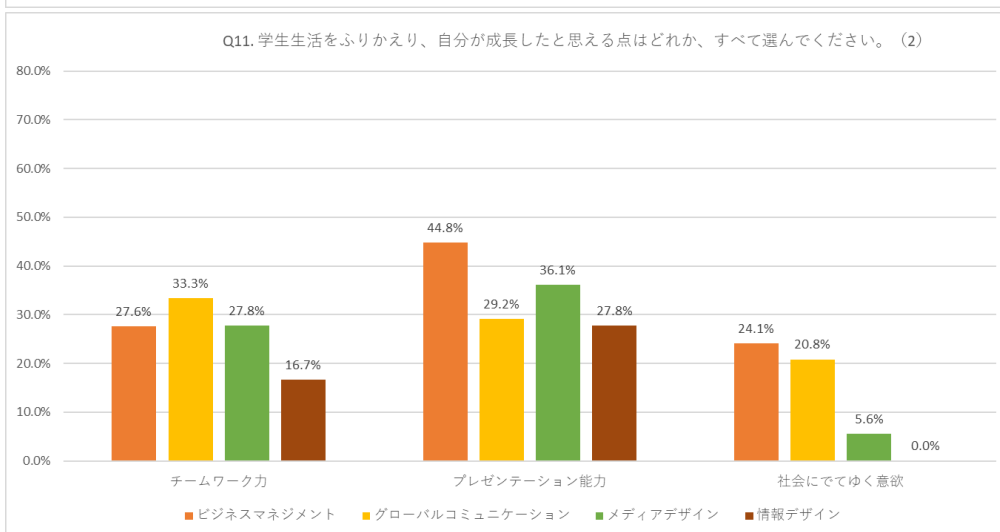
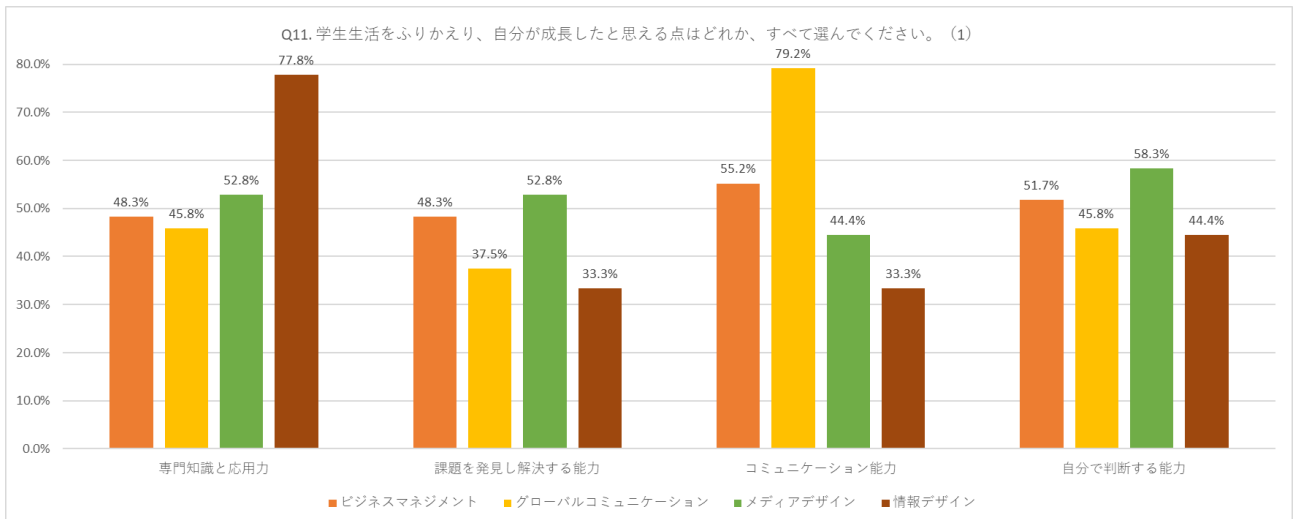


図 9 自身の成長した事項に対するコース別選択率

上図は「学生生活をふりかえり、自分が成長したと思える点はどれか、すべて選んでください。」の質問項目に対して選択された項目の各コース内での回答の割合を示したものである。

前年度と比較すると、「専門知識と応用力」「課題を発見し解決する能力」「コミュニケーション能力」「自分で判断する能力」「プレゼンテーション能力」を選択した割合が高くなっていった。本年度の卒業生が相対的に多面的に自身の成長を実感していたことが伺える結果であった。

BM コースは、前年度と比較すると「プレゼンテーション能力」を選択する傾向が高かった(前年度 17%)。授業や卒業研究の過程の中で他者へのプレゼンテーションを行うことで、自身の成長を実感していたものと推察される。

GC コースは、特にコミュニケーション能力の成長を強く感じていた回答であった(前年度 56%)。4 年次になり IIA コース教員が多数配属となり、過年度と比較して異文化間コミュニケーションをとる割合が高くなった学年であり、そのことが影響していたものと考えられる。

MD コースでは、前年度と比較すると特に「課題を発見し解決する能力」の成長を選択した割合が高かった(前年度 22%)。カリキュラム上の大幅な変更はなかったが、所属する学生側が課題制作や卒業制作において課題解決する側面を強く感じていたのかも知れない(個人差のレベルの違いかも知れないので深い考察は控える)。

ID コースでは、「専門知識と応用力」を選択した割合が前年度からかなり高くなった(前年度 39%)。こちらもカリキュラム上の大幅な変更はなかったため、所属する学生個人が専門性に対して特に成長を感じていたものと考えられる。

一方「社会にでてゆく意欲」は前年度以前から継続して全体的に低い選択率であった。キャリア支援の科目も全学年通じて実施しているが、社会参画への動機づけを高めるところには至っていないことが伺え、今後の課題であろう。またその他は「自身の問題を改善するための能力」が自由記述で記入されていた。

総括

本稿では卒業生の大学教育への満足度および4年間の学修状況に関する自己評価を分析した。4コースを専攻した卒業生の満足度や自己評価を相対的に分析したが、前年度同様、教育への満足度や自己成長がそのままコース科目と直結していると判断するのは避けたい。特に「学生生活をふりかえり、自分が成長したと思える点はどれか、すべて選んでください」の選択率の増進は、カリキュラムの大幅な変更がなかったこと等を考えると、回答した学生の個人差によるところが大きい可能性を排除すべきではないだろう。

2019・2020年度の調査結果の推移から明確なのは、「学修状況への自己評価」の項目において「講義・演習科目全般」が自身の成長に効果があったと選択した割合がかなり回復していた点である。新型コロナウイルス感染症対策のためかなり制限され、かつ活動にさまざまな制約が加わった時期を経て、さまざまな授業科目が対面形式でできるように回復したことが影響したことが伺える。前年度懸念されたオンライン形式による授業科目のネガティブな影響は、当年度の卒業生についてはある程度払拭されていたものと考えられる。

今後も感染症対策に係るカリキュラムや授業形態の変更が必要となることも考えられる。4年間を通じた教育課程の妥当性や質保証を確保した上で、教学全体で適宜対応できる体制整備は続けていくべきであろう。

(2022.9.13 作成)